

- 目 次 -

1. 第51回大会印象記
 - 1) 宿題の重さ・・・・・・・・・・・・・・・・・・富塚 叙
 - 2) 誰に何をどのように売るか・・・・・・・・・・田村 典江

2. 第51回総会報告・・・・・・・・・・・・・・・・学会事務局
 - 1) 46期決算報告
 - 2) 51期予算計画
 - 3) 新理事および委員会構成
 - 4) 学会賞受賞者
 - 5) 編集委員会からのお知らせ
 - 6) 次期大会の開催地について

1. 第51回大会印象記

宿題の重さ

中央水産研究所 富塚 叙

私は、2007年の第49回宮崎大会において初めて地域漁業学会に参加した、いわば新参者であるが、以降常に地域漁業学会に参加することを楽しみにしている者である。それというのも他の学会に比較して地域漁業学会に参加すると、もちろん、多くは漁業や経済の話の文脈の中ではあるものの、民俗、地理、統計分析、マーケティング等思いがけないほどの幅広い話をお聞きすることができるからである。もちろんミニシンポジウムもシンポジウムもよく企画・運営されていて、内容も興味深いものであったが、的確なコメントは浅学故に難しく、他の方々の後記に委ねたいと考えている。

そこで、ここでは、学会に参加するもう一つの楽しみについて触れたいのである。それは、学会の休憩時間や懇親会における研究者の方々からいただくアドバイスであり、報告に対して率直な疑問を提示していただくことである。今回の学会で、私はジュゴンの保護法制のあり方について報告させていただいたのであるが、休憩時間に某A氏(記載に誤りがあるとご迷惑をお掛けするので、お名前は、伏せさせていただきます。)から率直な疑問というか、もっとほんのりと柔らかい、そう「なぜか」のようなものをいただいたのである。

A氏は、休憩室の椅子に深くゆったりと座っておられたが、紙コップにお茶をつぎ、電気ポットの前に突っ立っていた私に声を掛けてくれたのである。私がA氏の横の椅子に腰掛ける。と、フーッと一息はいた後、「ジュゴンっていなくなったら、いかなのかな～」とA氏は、ささやくかのように、自問するかのようにおっしゃったのである。「生物多様性は、大切といたしますし・・・」と言いよどむ私、「確かに生物多様性と言われれば、そうねって気分には、ナルけど、ね。」とA氏、しかしと続けて、

いくらゼニガタアザラシが希少鳥獣だからといって、サケを食害していると言えば、何故殺してはいけないのだという漁師の気持ちも分かる、とにかく何かストーンと落ちないのだというようなことをおっしゃったのである。もちろん私とその答えを持ち合わせる訳もなく、A氏もあえて答えを求める風でもなかったのだ、これで会話は終わったのであるが、ただ、私にとっては何か重い「宿題」をいただいた気がしたのである。だから、横浜に帰ってからも（「生物多様性」という言葉を既にさんざん使い回しておきながら、気恥ずかしく思いつつ）今更ながら、考え続けてみたりしているのであるが、良く分からないというのが実情である。

そんななか 12月8日付け朝日新聞（朝日新聞は、嫌いだから替えてくれと家内に頼んでいるが、どうも洗剤等の販促景品に洗脳されているらしく、決して替えてくれない。）に掲載された天声人語では、【たとえば「戦争の悲惨さ」「命の大切さ」と言う。便利なだけに手垢（てあか）にまみれ、もはや中身はからっぽの感が強い。少し言い過ぎかと思っただが、賛同の手紙を何通か頂戴（ちょうだい）した。「平和の大切さ」も同じだろう。この手の紋切り型は納まりがよく、人を分かったような気にさせる。一方でものごとを抽象化し、どこか他人事のように遠ざける。往々にして、そこから先の問題意識と想像力を封じてしまう】とあった。「生物多様性の大切さ」という言葉についても私のなかにおいて、「わかったような」気分だけを醸成するという「紋切り型」特有の効能を許してはいなかっただろうか。蛇足ではあるが、これ、私の反省である。

誰に何をどのように売るか

（株）アミタ持続可能経済研究所 田村典江

地域漁業学会第51回大会は、平成21年11月27日から28日にかけて、山口県下関市の水産大学校にて開催された。大会会場となった校舎は新しくきれいな建物で、大変快適な環境で各報告が行われた。

合計21本の個別報告では、地域における水産物加工・販売活動の研究もあれば、国際的な水産貿易をめぐる動向や水産政策の研究もあり、テーマには多様な広がりがあった。この広がりには水産業の多面性の反映であると同時に、本学会員の研究・関心領域の広さを反映している。このように多様な報告や議論が行えることは、本学会の大いなる魅力であると改めて感じた。

初日の午後には「関係性マーケティングからみる養殖業の新たな経営戦略～連携と交流をとおして～」と題するミニシンポジウムが開催された。竹ノ内氏の解題の後、4氏からの事例報告があった。実際に養殖漁業を営まれている松本氏と村松氏の報告からは、養殖漁業が安定的に生鮮魚類を供給するという役割から一歩進んで、特色ある経営によって消費者に訴求し新たなチャネルを生み出していくべき段階にあることがうかがえた。また金尾氏の報告では、全国でも有数の養殖漁業地域を抱える愛媛県において、水産物流通の変化にマッチングしていくために、行政の側からも積極的な施策を講じておられることがわかった。さらに宮田氏の報告からは、全国的にブームとなりつつあるカキ焼き小屋の内実について詳しく分析されており、カキ焼き小屋というチャネルそのものに多様性があることを知ることができた。

総合討論の場では、養殖漁業をめぐる経営環境が、プロダクトアウトからマーケットインへと変化をとげつつあることの是非について活発な議論がなされたが、卸売市場を中核とする既存の流通経路から完全に脱却するわけではなく、既存流通と関係性マーケティングを含む新たなチャネルとの併用によって、より多角的な経営を行うという方向性については、概ね共有されたのではないだろうか。水産物に関係性という情報価値をつけて差別化する関係性マーケティングの取組みは、どちらかとい

例えば小規模多品種の沿岸漁業で採用されやすいと考えていたが、沿岸におけるマスプロダクトの代表的存在である養殖漁業においても、このような取組が広がっていることは筆者にとって新たな知見であった。安定供給が比較的容易な養殖漁業においてこのような新たなマーケティングが成立すれば、当該の養殖漁業の収益向上だけでなく、周辺の地域漁業にも波及効果があるものと考えられる。引き続きこのような動向に注目していきたい。

所用のためやむなく一日目のみの参加となったが、仄聞するところ、二日目のシンポジウムにおいても、水産物の流通をめぐる大変刺激的な報告があったとのこと。「誰に何をどのように売るか」を地域の漁業にどう設計していくかは、今後もしばらく、本学会にとって重要な研究課題となるのではないだろうか。

2. 第51回総会報告

1) 第50期決算報告

(1) 収入の部			(2) 支出の部		
費目	予算額	決算額	費目	予算額	決算額
前期繰越金	2,128,078	2,128,078	本部事務費	200,000	200,704
会費収入	1,950,000	1,844,400	通信・郵送費	150,000	123,905
一般会費	1,500,000	1,678,000	労賃・謝金	25,000	64,934
学生会費	250,000	156,400	消耗品費	25,000	11,865
団体会費	200,000	10,000	学会誌作成費	3,000,000	1,774,080
大会参加費	0	0	印刷費	3,000,000	1,774,080
抜刷自己負担金	0	44,100	労賃・謝金	0	0
学会誌販売収入	300,000	116,800	消耗品費	0	0
投稿料収入	500,000	360,000	名簿・会報作成費	0	0
寄付金	0	0	理事会運営費	0	0
雑収入	1,000	632	部会費(10000*7部会)	0	0
			委員会費(10000*5委員会)	0	0
合計	4,879,078	4,494,010	学会賞副賞費	100,000	95,550
			大会準備費	300,000	200,000
			(内要旨集印刷)	100,000	
(3) 財産目録			学術会議等団体活動費	0	0
種別	残高		予備費	0	0
郵便貯金	0		小計	3,600,000	2,270,334
銀行預金	1,149,519				
郵便振替	1,060,387		次期繰越金	1,279,078	2,223,676
現金	13,770				
計	2,223,676		合計	4,879,078	4,494,010

2) 第 51 期予算計画

(1) 収入の部			(2) 支出の部		
費目	51期予算額	50期予算額	費目	51期予算額	50期予算額
前期繰越金	2,223,676	2,128,078	本部事務費	200,000	200,000
会費収入		1,950,000	通信・郵送費	130,000	150,000
一般会費	1,500,000	1,500,000	労賃・謝金	50,000	25,000
学生会費	200,000	250,000	消耗品費	20,000	25,000
団体会費	200,000	200,000	学会誌作成費	2,500,000	3,000,000
大会参加費	150,000	0	印刷費	2,500,000	3,000,000
抜刷自己負担金	0	0	労賃・謝金	0	0
学会誌販売収入	120,000	300,000	消耗品費	0	0
投稿料収入	300,000	500,000	名簿・会報作成費	0	0
寄付金			理事会運営費	0	0
雑収入	1,000	1,000	部会費(10,000*8部会)	0	0
			委員会費(10,000*7委員会)	0	0
合計	4,694,676	4,879,078	学会賞副賞費	0	100,000
			大会準備費	200,000	300,000
			(内要旨集印刷)	100,000	100,000
			学術会議等団体活動費		0
			予備費		0
			小計	2,900,000	3,600,000
			次期繰越金	1,794,676	1,279,078
			合計	4,694,676	4,879,078

3) 学会賞受賞者

2009年の地域漁業学会(山口大会大会)において、以下のとおり、中橋賞および学会賞の受賞が決まりました。なお、柿本賞は該当がありませんでした。

<地域漁業学会賞>

市川 英雄 会員

『糸満漁業の展開構造 - 沖縄・奄美を中心として - 』沖縄タイムス社, 2009

15年前に書いた学位論文を刊行したものが、思いもかけず、学会賞をいただき、驚愕と同時に名誉に感じています。学位論文の作成過程及び本書の出版・刊行までに多くの方々のご協力やご助言をいただきましたことに、感謝しています。本研究成果が当該分野の研究発展にいささかでも役立てば望外の幸です。

酒井 亮介 会員

『雑喉場魚市場史』成山堂書店, 2008

地域漁業学会奨励賞(中橋賞)

鳥居 享司 会員(鹿児島大学)

学会を創設された中橋先生の名前の入った賞を、恩師である山尾先生より受けることができ感激しております。さて、鹿児島大学に着任して約3年たちました。学務に費やす時間が増し、研究の時間がやや減っている点に危機感を感じておりましたが、この受賞を励みに今後もコツコツと地道に正直に研究活動を続けていきたいと考えております。今後ともどうぞよろしくお願いいたします。

4) 新理事および委員会構成

(1) 新理事構成

会長：山尾 政博
副会長：若林 良和

部 会 名	理 事
九州・沖縄(4名) 推薦理事7名 合計11名	<ul style="list-style-type: none"> ・亀田 和彦(長崎大学) ・片岡千賀之(長崎大学) ・島 秀典(鹿児島大学) ・佐野 雅昭(鹿児島大学) ・李 善愛(宮崎公立大学) ・鹿熊信一郎(沖縄県庁) ・波積 真理(熊本学園大学) ・佐久間美明(鹿児島大学) ・鳥居 享司(鹿児島大学) ・久賀みず保(鹿児島大学) ・日高 健(近畿大学)
中国・四国(4名) 推薦理事2名 合計6名	<ul style="list-style-type: none"> ・若林 良和(愛媛大学) ・板倉 信明(水産大学校) ・三輪 千年(水産大学校) ・山尾 政博(広島大学) ・竹ノ内徳人(愛媛大学) ・濱田 英嗣(下関市立大学)
近 畿(5名) 合計5名	<ul style="list-style-type: none"> ・前潟 光弘(近畿大学) ・榎 彰徳(大阪いずみ市民生活協同組合) ・田和 正孝(関西学院大学) ・田中 史朗(兵庫県立川西緑台高校) ・河原 典史(立命館大学)
東海・北陸(3名) 推薦理事2名 合計5名	<ul style="list-style-type: none"> ・加藤 辰夫(福井県立大学) ・磯部 作(日本福祉大学) ・常 清秀(三重大学) ・林 紀代美(金沢大学) ・東村 玲子(福井県立大学)
関 東(7名) 合計7名	<ul style="list-style-type: none"> ・玉置 泰司(中央水産研究所) ・宮田 勉(中央水産研究所) ・田坂 行男(中央水産研究所) ・中居 裕(東京海洋大学) ・工藤 貴史(東京海洋大学) ・濱田 武士(東京海洋大学) ・山下 東子(明海大学)
東北・北海道(2名) 合計2名	<ul style="list-style-type: none"> ・宮澤 晴彦(北海道大学) ・古林 英一(北海学園大学)
韓 国(2名) 合計2名	<ul style="list-style-type: none"> ・金 炳浩(釜慶大学校) ・姜 練實(麗水水産大学校)

会計監事：伊藤 康宏(島根大学)・米田 寛(みなと新聞)

注：部会名の後の人数は、部会員数を反映した理事数。その下の推薦理事人数は
会長推薦枠の人数。合計は両者をあわせた部会理事の人数。 は部会長を示す。

(2) 委員会構成

学会賞選考委員会

- ・島 秀典(鹿児島大学)#
- ・伊藤 康宏(島根大学)#
- ・若林 良和(愛媛大学)*
- ・日高 健(近畿大学)*
- ・加藤 辰夫(福井県立大学)*
- ・婁 小波(東京海洋大学)*
- 磯部 作(日本福祉大学)#

学会誌編集委員会

- ・久賀みず保（鹿児島大学）
- ・金 炳浩（釜慶大学校）
- ・佐野 雅昭（鹿児島大学）
- ・田坂 行男（中央水産研究所）
- ・鳥居 享司（鹿児島大学）
- ・林 紀代美（金沢大学）

国際交流委員会

- ・玉置 泰司（中央水産研究所）
- ・波積 真理（熊本学園大学）
- ・田和 正孝（関西学院大学）
- ・常 清秀（三重大学）
- ・姜 鍊實（全南大学校）
- ・東村玲子（福井県立大学）

注：学会賞選考委員会の、*は2010年9月、#は2011年9月任期を示す。各委員会の 印は、委員長を表す。研究企画委員会については、決定次第会員宛に連絡する。

5) 編集委員会からのお知らせ

理事会及び総会で、シンポ及びミニシンポに関する論稿の学会誌上における取り扱いに関する下記の内容が確認されました。関係会員におかれましては今後ご留意頂けますよう、よろしくお願い致します。また一般投稿が不足しております。会員皆様からの積極的な投稿をよろしくお願い致します。

(1) シンポジウム報告者の原稿の扱いについて

シンポジウム報告者には原稿を依頼し、これまで通り査読なしで掲載する。ただしコーディネイターは内容をチェックし、学会誌論文として一定水準以上となるよう指導する。要旨（和文・英文両方）を付けることも義務とする。ただし、論文化が困難な報告は、「論文」としてではなく「報告」として掲載することも考慮する。

(2) シンポジウム司会の原稿の扱いについて

司会はシンポジウム後記をまとめ、「論文」として提出する（司会が複数いる場合には共著とし1報のみとする）。各報告内容を要約したものではなく、シンポジウムで闘わされた議論の内容をまとめ、学会の共有財産としてどのような成果が得られたのか、について「論文」としてまとめて頂きたい。

(3) ミニシンポジウム報告者の原稿の扱いについて

ミニシンポジウムが行われた場合には、論文の提出は依頼しない。報告者が報告内容を学会誌に掲載したい場合には、コーディネイターが投稿の取り纏めを行い編集委員会に一括して投稿する（報告の一部でも良い）。編集委員会はこれらについて一般投稿と同様の査読を行い、パスしたものに限り論文として掲載する。後記は掲載しない。また、複数本を掲載する場合にはシンポジウム特集号の中にコーナーを設け、一括して掲載する。

6) 次期大会の開催地について

次期第52回大会は、中国・四国部会のお世話により、愛媛大学（城北キャンパス：松山市中心部）で開催されることになりました。日程は以下のとおりです。なお、この時期、行楽シーズンに当たるとともに、テレビの「坂の上の雲」ブームもあるため、早めの宿泊確保をお勧めいたします。

- 2010年11月5日（金）各種委員会、理事会
- 6日（土）個別報告・ミニシンポ
- 7日（日）シンポジウム

地域漁業学会

<http://wwwsoc.nii.ac.jp/jrfs/>

本部事務局 〒890-0056 鹿児島市下荒田 4-50-20

鹿児島大学水産学部内

Tel & Fax 099-286-4280

担当 佐久間美明 chiikioffice@gmail.com

郵便振替：01750-0-83886

銀行振込：鹿児島銀行 きしゃば支店 普通 834624